



俳諧棚さかし

蘇太口述鼠腹記



宝曆甲申正月八日於五傳房初會滿後後社

蘇太口述

鼠腹記

一 總序末其行よあふきて世といと静之吐身  
形鯨雷堂出席雜談の折よく同て之今忘る  
百負或ハ奇仙をく満後れうと連元よと教た  
福を奉白よ次く十白乃至廿白條無と之致  
中阿りの川の比より始りたるるり小也



一 昔一 大なる此の如く申すもよみ人〜 昔〜 一  
 中なり心〜 世のまゝ花のま鏡ハ上御う候事  
 此の如く申すもよみ人〜 昔〜 一  
 一合の理あること〜 芭蕉翁〜  
 め〜 芭蕉翁の俳諧を見出〜 後〜 一  
 とも門人の白紙〜 古の如く〜 一

志うとて古の芭蕉翁を世う〜 古〜 新〜 一  
 只今も新〜 是もて合点〜 一  
 返〜 ありよ〜 申す〜 一  
 何れも宗匠の筆且帖〜 加〜 一  
 東法家の書帖を思ふ〜 車井よ〜 聲を結ひ  
 多の筆且〜 捺拂よ〜 一  
 申す〜 一  
 あり〜 一  
 一

うすらうの白ハ色の山うへん徳よー一安ふらふは  
小や又情の厚さうのふふふと心も古けと  
作老の徳よりなりひちりせぬるお時ふれ  
不易れ功あつり色結るくさくさとして懐てん  
今古の符合様——くちく自傍たり

同二月八日會後

一 同云 猿の養ひ集め

不つとてててててての森花の志つてて

芙蓉の花れとててててて

唐のうへてててててててててててててててて  
押出——く芙蓉とててててててててててて  
け——とててててててててててててててて

一 昔いうちもさうてててててててててててて  
本芙蓉ハ志るむたり

同二月十八日

同月廿八日

風烈打流きて會ち

同三月十八日會後

足踏くく像を思えりるの巻 杜公

一 同えける只あり此す一の巻よや

一 吾を毎ちり人の命いぬの晴るを待たぬといふ  
んこのりるを又枕草紙の初瀬をいふまゝしてはる  
布したる程とくはさうのまゝ車はまゝして  
きとくはさうはさうのまゝは法師をいふは結と  
りか物とさうはさうのまゝはさうのまゝはさうのまゝ  
らとさうはさうの程のまゝはさうのまゝはさうのまゝは  
といつはちりくさうはさうのまゝはさうのまゝはさうのまゝは

解悟よや

一 氣云のやぬ時と眼をとちて袖中よまの歌を  
絵よまゝく見よ報向うこのまゝといふの賢く教へ

一 吾いふまゝよく理屈の妙ける程よ教へこのまゝあり  
されともやもす進ん後の事を忘れて理屈あつては  
素一ぬまのちりりそまゝのまゝ淋淋余情はし  
ひらむれ病もまゝはむね懐の巻よ

二 吾をちり乃る秋の申かゝる

何の身もたなくありのまゝは絵なりり平光年

吐丹と南総の浦つるひ

秋風やいりもあそびくもの敷

とりふちを棄てし一里をうり行りよりの

敷ひひそしして例の縁を忘るり

秋風やいりもあそびくもの敷

とて並に——しそそ大きき姿をわけて静かに後

一筆に墨法あり

一 同云々——合のり季立の中ハ高樹いろくの

書あるものかうしつらういへく押出して一人の

意いふぬ相を何を用く志うるべきや

一 昔季立ハ増山井原合ハ沙傘をふひの外ある

屋うら季立ハをせ成翁の師之貞徳ハ師志

師あり師文徳翁のりこころは師ハ隠たうさ

在人之和書とくそを法け給りぬらあそび

今時古学のあるれうのとををりかた始は眼をたけ

給ふけんこなりいつきの書よらうこたて徳に

るなりとくく古人乃てくらしき事うけ

志保あるりく芭蕉翁もく——合ハ沙傘をふひ

あまほすししちやさきとてふと志うしあうし者の  
 継造とをせ成流より姿情の遠あまはる舎も又松あ  
 なる所ありそとて一社の宗匠の樹とて後と大む  
 古人よりしつていつていつておよほむとるさやれ  
 初つたこの彼うさうつたこのとりとも親類あは  
 あふぬたりはとてと季立ハ古人乃書りしあま  
 とても腹しき季立うし秋あつてはうし魚あ  
 中たりも存も季立の心も川も披し出たは  
 後世よふに賜たりとて行徳る日あるも其をよ

流うひそあしきをりも厚風呂あつはし  
 築は糸は絵臨あしつたをまき季あみけしりも  
 あるたりも季立と兼白より出るる物あまは  
 阿かうち若芳よする物ああすしとせ  
 焼飯の花もさうりつて六つあま  
 とりも兼白よ  
 秋を隣りり麦あつてむたり  
 と附りり季立あはかけと麦秋の隣た  
 なるまき季たり



浦山の花も序より入るなり

まこととよき世とて夜うらなり

是おも苗意昂妙の春季あり

四月 五月 六月 世波よりりる會ち

同七月十八日會後

一 嵐云吟声とあゝぬそのく下よりりるをいふのよ  
柏子り遠く面白むもさもあゝまゝなり

一 昔云歌の歌あしむむハ習あてふ懐きぬその  
うゝある人のけしき一 次もよと又類も

りや中を去り縁ハ奇ハ海はぬその...  
残厚の歌あしむむ初春早春とて  
さほもありとやとあゝ人のけしき  
茶のとも歌を歌とてやとあゝ人のけしき  
そのなり

一 同云奇ハ割の海りり色を愛むなり  
せきつゝなり

一 昔歌よをよゑのしとあゝなり  
白むむすなり

あるちりより〜 遊覧あり〜 けいふの  
方の手柄あり

菜花や花や花かゆ〜 山田

乃妻や花〜 藤原松魚紅

花の移るも花よ花も別れの云々〜

とも〜 信のはまを望む武江の市〜 船の

子舟よ〜 小舟よ 遊覧あり此も〜

あ〜 かつ〜 けいふの活計あり

同八月八日午後

いつた〜 藤の葉よ〜 おふ〜 里奈

一 同云様養集幻住庵の日記よ〜 文字世極め  
半〜 あり〜

一 善清虫の日記よ〜 ね〜 山田胸なり〜 白宗  
あ〜 お〜 かつ〜 花の葉よ〜 盤や〜

ん〜 ことめ〜 山田の寂を〜 面白〜  
武蔵野ハ〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜

名月や葉を〜 藤も〜

一 けいふを〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜 あり〜

すたす令の江都に警備を乞ふ所して押入るゝ  
あるとのまづは感吟あうとちと善心雨とあり  
やうみ承りたり秋の露に風姿余情限あふ  
悪評いり

一 吾菴中の評もすゝ再あり

同八月十八日 會

同月廿八日 會

同九月八日 休

同月十八日 會後雜談

一 葵之迫る所の宗匠予う松の嵐とつふに作を  
悼る文中よ紅浪の筆を深てとまゝとあるを紅  
浪ハ紅粉を粧ひし人の涙をうてハいとぬあり  
葵を去る化粧あるうと笑ふはより我人を去る  
東洋老人ハ又海志するをうとけり机と軒庵  
集の由たありしを何となく見とる昔よりの  
ためしあり

くまの色のよそ出る我神み  
せくと新田に河あふぬとも

とんちんとそも紅澁う志うれと阿かとも紅粉  
糖の道よりとんちんとそも若うとておあはれと  
先ん程くは侍てと成とそも世若くは風流の事  
おー記事ハナ

一 同云今おりのとんちんとそも若うとておあはれと  
神釈急名不なともあつとそもそも古式よあ  
るのみや

一 昔そは古式といひ程の中りともあつとそも  
奇仙をなまちめそもそもそもそもそもそも

めそもそもそも神釈お申すそもそもそもそも  
古人の捌ちりされとも古集よあておくとそも  
ぬちりり冬の日追加の毒よたよ糖とすそもそも  
とつそもそもそもそもそもそもそもそも

同十月八日會

同十一月八日十八日會

同月廿八日納會と取百負無の連流十三人志師  
知社

明和二乙酉正月廿八日初會後社

一 洞云 継啓を田舎のうらまは面白くもなりしあり  
又句作の上れ田舎なりと詠なりはなる時もあり  
日くぬ時をあるなり志しと詠辭の日くもか  
少たあるや

一 善 継啓のむかひなり詠なりはたしと田舎人志し  
よまの句ハ詠なりと詠人よらしと詠なりをや  
ありありありとく田舎なりは趣深き面白く  
之詠なりもありしらく詠ちやくと詠ハ田舎  
さしせんしてそれ者ハ詠なりと句もなりし

継 氣の 挿て 長 茅く ちうん  
馬 不と 吟く おとと 一 疋

ちうんといふ面白くもなりしと一白は理屈は詠なり  
挿てといふありしと一白も詠なりと詠人志し  
ありしと一白も詠なりと詠人志し

ちうん——ちうんといふ面白くもなりしと一白は理屈は詠なり  
挿てといふありしと一白も詠なりと詠人志し  
ありしと一白も詠なりと詠人志し

一句の御ふくさしそいふ程のふかあし御  
群と群はよく日うか之勢の強よ群と群を  
あふくうーこさ人ハ早く目を射てたうを  
や群ちりそり群人よそも心の群人之をちり  
群詞かともまや中ものうむちりそちりうん  
田舎人の群れあはれするハいや群物よ人も  
ふくむくあはれ群人ともあはれものこも  
いふ群女のある田舎人よあはれーうんこま  
田舎よそあはれ群あはれ世はうハ群あはれ

詞をく世はういやくよは男と金持よ  
人ととも中詞あ傾城ハ健てあはれそあはれの候  
あはれ人う可也ちりそあはれの候あはれ人よあはれ  
あはれハあはれものこもあはれ詞をくあはれあはれ  
ようあはれ人あはれあはれあはれあはれあはれ  
あはれーあはれとあはれーあはれあはれのあはれ  
うーあはれひ者よあはれあはれあはれあはれあはれ  
いんやあはれあはれあはれあはれあはれ

同二月八日會

相模

同月十八日廿八日在障會かー

同三月八日會後

一 同之意門の人此常侯は細沼の執りハ許さく  
 乃るりたるハ廿年の禁入(度)とーとー  
 少くさるやうさくやのえぬ何なり許ハ何事  
 さして許といふや或る事とさく次して度ハ  
 さく禁入より目目をさく生涯頂をさく  
 志すいさくかとのありけ不審い

一 吾一大事のゆらぬや此許を禁入こと此の程を

と川の中く宛めく記取なり出んハさく  
 うる及老危多うとーとー急険難の地とさく古人も  
 此許ハ乃何くかと百練とーとーとのと愛の附白  
 とよは彼絶頂とさく一字と減次とさく一字と  
 増くとの平原の地ありとさく乃何ぬらハ  
 許ハハハハハ

清澗

清澗の水汲よせくこと海とん  
 清澗は海よりあらや夏の舟

相抄

清澗の浪よ春をうし一夏は月  
清澗や浪母ちり也喜松葉  
祖孫の粉骨をうりけり白よおわては喜松葉  
涙をうり是うううと送あ〜ん志う〜かく  
かろ〜〜痛する所よあ〜さは〜

又附白

嗚〜〜泣けえ能き忘々  
ひく脊負出屋愛風のりしる等  
祢うひと持く女のつま様お

何ヶ夜も男やうさうり此祢うひと

けり白よおわては男浦さうりう涙之是ううう六  
送るをうり三白よ三條の智あり口傳去比眠家  
と死の白よ十半の痛あり阿婆うよ此涙乃  
流白くまてあ〜一眠家よ〜しては後阿婆一

同三月十八日會

同月廿八日會

老所松澗の思之あはは四月より十月と會あ一

同五月十八日會後報候

冊文

十五



一 夢之継沼ハ老後のこのことと尋の中さき一ハ  
 やすさやうとみく言あること此詞にある老人の  
 こそ貴族縁をうるとして我ら何れのため  
 みの江山縁流をそと人の同されたされは  
 比ううくと一藝をま習ひたけりま今さ  
 くとま交を改むる後悔先んたは君様を  
 加ふすく貴族縁親に母あぬ松よ何ち  
 とも老後のたのしみあふ事とさうひ  
 たまくと流あやさたりとそ世はいつる親に

乃こまきこたり

一 夢之貞徳の神日記より大的連歌といふあり  
 何を付てもはくお白くされもの一的の母一  
 あ〜ぬいつけさといふものよあ〜ん

あ〜ろくま〜とまよ〜んそらと

とりお白ハ早春らり晩春をいつぬるハ心と  
 をけとと早よあ〜ん

あひよとま新枕香の梅咲多 宗祇  
 うろ嬉しとつら西をよく押く〜りこれ

早之御詣程々世心あり

一 又云是奇人多く多くしる事なれども其  
義のうかれ室のこゝいんや御詣りは

一 又云是等より源氏物語の事を知る源氏全巻の  
是をみる人の子人は御詣りくさきと只御詣り  
多かりともその事をつらうしとたると御の切乃  
こゝに御詣りも奇物語をとり交へて記すの  
一 又云白の物語に細工者の芥より新お詣り  
本紙様は是より及ぶこと御練直しとあり

一 又云是人も醜人も顔の形うりて七元も同  
しとも趣あひまかよふはうく趣まはあ  
白のよみ下りもうくのこゝに御心の人を  
る

同十二月八日 納會点取連流九吟  
明和三年戊子月八日 初會後社

一 同云系大坂の土地は御詣りありぬといふ人あり  
土地よりよく御詣り  
一 吾人なる御詣りあり何れ其故の土地は御詣りの會

けりありあつらんやそは昔芭蕉の戯をよそを切と  
 俳諧を於の古より何をいひてつと田舎人乃  
 備座よいつれともありぬと思て存るくそ世の  
 時が不幸中して京より俳作者のたつたおこ  
 そをいひあつてそこのちり昔貞徳も幸ひ  
 此之圃も皆於人之大坂も宗周宛鶴事山伏  
 ちしめ名人の出たつちりそも今田舎人ち  
 つたつたけあり稗史の比喩より流くそ  
 ちの俳諧一丸のちりち去地の人情よ合せそ

大に度めたる一白いそこのちりそのおく田舎人の  
 身みふ川ても流るそそり川てすぬもの家  
 大坂も下りてそと並之流くそ甚角骨者も  
 流しそそ流の作者たりつたぬとて下りてハ  
 いふくは

解るうとそこのちりそぬや鶴の流る流く  
 去来凡そそこのちりそ一丸 全  
 神記ちてむらひ一水のちり流るをまよふりあか  
 風和そそんといふおれんちりそは解るはうそ

めくは嵯峨の冬こりりを家養老よりけし句に  
 素素氏ハ二月中旬旬は紙を然すといふ古事歌  
 子浦へそ冬とまよふの思ひをいかにとのみそ  
 い川にも多きをそしして下年のあはぬ雨く穿るる  
 斗のよけを詩をちりも任解とさるるい  
 きこそぬ中もわりーろい句ハいらくも何なる  
 彼方える句好くちよけ紙を志ろといふそ川  
 ても系るやーしちり又方える句よも

曉や一仄の中よりききくも 淡く

志川吉和波のそくぬ岩のうへ 全

同日十八日午後

己のそくやむくは其のそく兼紙 荷兮

志川や紙の潜よりふの麦原ー 全

- 一 同云け二句曉抄集兼紙の部よ入り句をい
- 一 言世二句ハ先年七部抄撰時先師の書とあり  
 くらとれもちりーそそ書の兼紙よ同をり  
 くらとれもちりよそそ書の兼紙よ同をり  
 くらとれもちりよそそ書の兼紙よ同をり  
 くらとれもちりよそそ書の兼紙よ同をり

舞の多つては流り必詞半の入居さるる序の  
 文中を味りあつて東武より半く御しむる  
 又由れりよは己の年ハ荷分る生辰ある  
 依る昔れ妻のそと来かと思ふ又時をう  
 親想とするく可しくや様よきせしる様の面  
 とりふ白まは月一 次ハ様や志川様のを  
 くり通し一昔を今よあすよりもう年いふ  
 詞をうりき作しむる白く是ハ田舎のそと  
 様をなく二月氏子の系指さるる教法とて

職をまゝく荷ちりりそとよおのふせりそと彼別  
 神主の味留はく料は大きを一村の教供すは  
 あり又お富油作るためとて小麦中とちすも  
 志川や様とハ様くしむる系指のある初妻の  
 ありん是をりあははるのう様思案あはる  
 たすよ一しはるより人の白をばよ智あり

地理 親念 老若

所説之是よそとんまはる白の腸あきしうあはる  
 あ門こふやち浦うけく夕涼

けりの上れや文字者さして出せし集りりいふも  
や文字を角のやうに思はゆりしは先年家深  
竹勝の比福浦より一名しは白を思ひ出せし  
あつしは白をくんとて福浦は只下への字ハ  
阿門とやゆや福浦と首をめぐりしは白く  
志うまてくらの骨柄と有りしは白く  
あつた面白くも格別をりしは地を思ひ出せし  
字をぬくもあつたは

一 同云後集の序は俳諧の集つるは古たよ

さしり比奉白集を讀くはとて花とさしり  
橋とは古端思も志するはとて云文ありけ詞を  
ちしとつては物とされはとて用ひしは力  
結文之甚角はとてかか詞をさしり名人とて  
福を俳諧の源氏といふもなれは中つとて  
かくもを合巻のしは何ものも入るはうねを  
用よとてましは古人の骨柄はとてやはしり  
るはとて今時俳諧の集一初思もせぬ人乃  
白く知ぬのなれぬのしはとて海しはとて

五中

一 同云

二の厄よ金糸の花れさうりす

蝶ハ薄うりしとこころをさかむ

け二句冬れ日あり二の厄とは二位の厄をよ

略云ふや

一 吾二の厄といふやういふは二位の厄乃らよそ

とよみうりす只一福二福といふやうに二の厄と

んきと云ふうに福と一福はけり白ハの厄や

金糸の花を同くはそと只薄のこ荒やうりすこと

とふちかかこころ老の本懐をけしとてむい

物終ふよよとてけたり薄の跡ありよとて

とふちむとふは泣きよとて涙長物終ふよとて

詞をり鼻声よとてのうちのふたし泣声よとて

ふちあり又薄を家れうとてとていふとてあり

とてありとて家とて八を薄よたすけらとて朝

浅月をよとてとてとて

同月廿八日風烈會あり

同二月八日會後

一 同け此れ点多し梅も蝶の付白くしつこく有  
 とき所非云たりありあり梅花は蝶此ちくの  
 つぬとつ不待あそみさりとそそゆそそ時言  
 お遠しつりありあり

一 言、つらもさうなり八重梅の此は蝶も舞  
 あそふあり又けふの古人は梅乃待し蝶と結ひ  
 多るもたりを眼非れ風情くそそさそも梅の  
 本意とする西の徒花はんそち寝くさむ

いささ蝶あとの飛ふ系とのあそぶありあり  
 ありそつ梅れ風姿たり

そつとあそぶさうかそねも白あそ  
 新梅の梅れそ風のは月さふ

奇くも初よりあり世心そそ付白くも困於る下  
 初梅や骨あそぶ男あそ梅のそ

そ梅集の白たり古人は麻忽あそハナ  
 一同此れ去旨は平の半梅あおを思ひつる梅あそ  
 ぬそつ詞さ梅ぬものたりそそあハおんそも



おけきとく救あ〜ぬとよむハき人々之位の人乃  
るありとあさ〜うもむなる〜ゆり〜又芭蕉の撰の  
うち丹尼奉貞の男ま〜り〜る〜て〜て〜て

救あ〜ぬ男〜ふおひそ魂祭 翁

― けりハ自他の遠き〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
― 善〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
他〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
初初人〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
そ〜い〜い〜い

一 次之身應記ハ五〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
志ろく歌〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
― 一〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
見けて十七字れ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
趣白をせぬ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
ゆ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
新のそらひ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い  
葉は〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い

撫くささくくをらうとくそとく却て吹声の時  
あをよと栄あり集の御沿ちとハ切者をいさよハ  
あゝぬとりのをけるなり只附白ハ前白の情よ  
落し入らぬやうよ麻をきく活なきよ素とく  
古人の姿う先之素せよとハあ白の理届おとさぬ  
もうとれるなり今附姿くくと況あうく人くの  
白あまう情よ落くあゝぬ中をいひあうら  
多しけやと上白の射白くく員流玉なるや由  
白他ハ忘り姿ハ絶くくこのうといそ居るといふ

白を今何人うせると抱くうひの女房いぢり  
ささいそ

悟氣の角を却てこかうも

と附りよく姿を見出さるる人あり  
是ハ風雅の風よも並ふものよもはくは白  
あまそこそとくもすは平生の人みうる秘ち  
こやくあうと嘲もあるすさおろの人なり  
け作老の楓籠を思ひやとくあり繩簾の切て  
居る姿あゝをのり不現居をけりたるりの

ちり風船ハくるむ川へとちりハあつた

二挺をちりくくかりくちぬ

是ハ川後部ニ取つる魂チ川里

親ハ死すとい川死すを扱くとうちおろく成  
たる船宿の門先見るん地を一向の活達志も  
在常迅速なふくくくくさう苗流慈門此骨長く

白潜居士追悼

非兄氣腹子ハ君門ニ控ヒ御座のおうく  
采をきくふ平相あー流を汲のちあきり莫  
逆のあきく中へくくくせあきり或日ハ書を  
徳く聖賢のたしをきくある秋ハ必言紙  
印のりて佛祖の賜をさくくく水と彼喫ら  
醫業此さうんあるよむく我ハ世る此色く母  
そくくく二くせえりハ緒をわくくく日もゆし  
海へてあきくハ流生事と里代々母をく水

五月初病ようとて雅兄傳は病起り早月  
 末の九日晴しやうとてのうかきなりとて  
 ときくは病よおのこ悲しむ老所の悲傷  
 社中の人くも眉をむすむ今之くまはれは門  
 園乃滑靴却て随森の涙もあまなり鳴呼  
 亡更け一集を思ひくち梓行もあまの  
 比あまて本意かく和らむむ依るそあは  
 さしを結る昔情ゆかを合せ極まらりハめ  
 又くくの之をともく亡其の微影をく傳ふ

是我他家の魂を拓くまのりや魂のこく

魂棚やとく披くも糸は家 魚波  
 泣とて袖より涙身乃屋中 吐月  
 病よくくこあまのりてよ波よせて 葵太  
 風を袋より風をまきくり 波  
 病よ解るをふむけその重去産 月  
 裕よりあまてありせをれとも 太

實様は沙室の下の此船を記  
りさし親仁の新しくめ  
茶碗をいさまたしを理かむなり  
赤間を意の園より日く侍  
袴もくや整はれ初日乃夕  
船のまけのあしきとこそ  
唐は名を鳴り神を破芭蕉  
旅しき我も終む十卷  
合ふれむるものふ存ひし  
右 月 汶 右 月 汶 右 月 汶

吟倒されくも此のちりく  
甥らしき身て出代乃時をうり  
去年もあしきもまはき屋深  
茶室の小判は流院をおとる  
そと付死は友をたはしく  
紅巻く下略の連歌ゆりし  
転るりしきとさうりしき  
里下りの玉藻乃あを侍り瓶  
なり十月は紅巻と記めく  
右 月 太 汶 月 太 汶 月 汶

相抄

さむしとや采女の手はしら白  
 鞠のそとより此は花より黄昏  
 二三膳をくらひてころろ汁  
 目此あるやうか花散ちるころり  
 新細く流さく月丸をいし  
 阿しおろしと神志何する  
 使みは初めさるころ角力私  
 袴きしひれむち紙 紙巻  
 面白のそととあま又流さるり  
 月 太 汶 太 月 太 汶 月 太

雪のかせともそとと三川花川  
 夏宿屋も花の節日よきうしん  
 人あしとさる世はあ見えさ  
 月 太 汶

相抄

相抄

四時

旅途

秋といつて淋しき麦の夕アかか 天府  
 有たりしれをや卒身の舞云 婆心  
 客ありき我を揺るる白うれ 秋風  
 葉の茎や裏表をさ小家うち 綿衣

白鹿混雜

いさ階れ名下うるれ阿くひ程 吏鏡  
 嬉しく揺かりて花うらみ川 吏流

世の中よさうふたえそ小春が 抄水  
 ちるお母果あふ海の子さうれ 芳堂  
 冬食やけつるもの少く候乃波 眠家  
 春ひく志うらふ揺れ秋明うか 鳥曉  
 牡丹ちる日較や一重家おうら 桃鏡  
 窮屈舟下戸の月を若る柳うか 匡中  
 下戸へ来る麻れ風や候乃月 花明  
 うらうらと田の中は揺る種 鬼舟  
 葉のうらそちを春よそそさう 南苑

草花や下戸あしぬこそ男山 是物  
 雲のまゝも志ゆりはめりり雲の秋 翠羽  
 白菊や白さを保る秋もかき 文母  
 湖を乃とあはせしる小秋徳 氣腹  
 茶島や福白もこのさき徳を以 柳坡  
 夕暮ハ柳下ハ川やうかの秋 紙什  
 能因のまゝおろしとや相一系 女 襖三  
 吾れ秋や戸明くさくさ白を赤也 北魚  
 夜くると蒼ぬ志氣あり海くまに 太喬

苔つてふ草や秋や木は後月 新鉤  
 名月や地も風も川もく乃親 秋 求光  
 秋くるとあしりりりりり梨の冬 嵐亭  
 稲妻の秋くくくく秋比うぬ 班象  
 ちくもさるふいさあふ花の衣も加南 必親  
 五十年間を祢うかき鶴烟うぬ 白牛  
 富士印ハ川降ゆしりり雲の夏 仍 控國  
 あう川さの柳下晴るうくく武 南氏  
 秋秋や来たり川乃竹袋 五旅



唐詩

秋風ととり舟とるやを川松  
 友路  
 若菜や麻子のこゝろ旭光  
 白翹  
 世もや多くてあいの家とより  
 乙児  
 麻の葉に裏より秋風を後か  
 虚舟  
 立くぬ茹子舟秋の月白ひか  
 稲里  
 修行者よりゆくをより喜嵐  
 菜室  
 冬菊や杖二三本小柴垣  
 其水  
 岸くこも思ひの男をさへし  
 成  
 菊ふりて菊ふりて秋の香  
 莖路

涼くさや竹の古葉をゆきかき  
 人  
 山彼れお火の海をく焼ゆか  
 穴窓  
 雪や雛の冠をさへて人  
 乳峰  
 久くを忘れ峠やうら乃舟  
 松隣  
 喜柳や雪居をせしと雪ひか  
 如風  
 音くくを石よりとある神もか  
 百頁  
 枯芦や月をこゝろとけり  
 吐月  
 君ちよとて小舟舟を渡りて  
 怯車  
 初層や江に遠出る田一枚  
 富屋

明使

廿三

淡柿やをののねまふまおおく  
只の事みよるま一麻の声  
藪入や棧めつ〜く二之尺  
あの枝と乃なきハ柿のうきより  
おひ〜はま見え〜て菊の香  
き〜一羽人の見え〜ぬ湯うか  
風の漣来〜り吹て暮よりり  
田畑より静〜ちうさ花押うれ  
い〜〜旭ハせ〜り冬の梅

風宿  
然我  
連丈  
逸契  
鬼秀  
夜免  
秋梧  
菅成  
子交

を〜声やあ〜〜若流のや川と〜り  
市中は声〜もえ〜るほ〜き守  
葦の河〜〜を〜ぬ花大哉  
綿衣を〜立〜ち〜さ〜飛雪  
新〜〜花の香や柿む〜之  
地獄〜ハおも〜鴨の浮森うれ  
葦持や名〜ところ〜山〜見  
男〜〜山〜見〜る裕〜柿  
雪の丈〜〜目を〜〜言〜か

飛求  
花口  
山幸  
長羽  
丸水  
吐江  
園牛  
風足  
葉徑

花鳥や月夜馬もこの馬に記  
 尚兵  
 夜梅や経よりこの借記より  
 吏中  
 藤花をよやゆき合て藤の力草  
 文素  
 管や地を控現れこれ声  
 抄就  
 君の歌や何玉をよりと又佐の夢  
 班石  
 ありてよめを相ともいふて夢より  
 子之  
 うくくその力よ歌の君見う神  
 氣大  
 夕立やおりひ切てる傘の音  
 千牛  
 鶴一羽をこれ尺とるあやうか  
 鴨川

弓心人の胸加よおてる花袖うね  
 魚波  
 入る舟と来を記富の瓢の神  
 祇卜  
 雛立くめすやあうこれ小人歌  
 玉斧  
 苗代やまゝの葉立せぬ稲すめ  
 鳴傘  
 白老やいうりやすめて秋又山  
 琴篋  
 きのおりも風も花鳥も尾花うね  
 美人  
 十六騎く月さやういもや嘉定哈  
 川條  
 舟の花や仏生るくあさるくあ  
 岩凍  
 志く魚や橋舟の舟尾之の末  
 貢取

紅糸吟く月や深つらん鱧の魚  
 風や祢々々みまよふきき川  
 みーく秋やまよふまよふありぬ意  
 此言り中埋まもせし次を言は  
 志く雲の飛そくくや秋の富士  
 自れり中夏のすりぬ枯の神  
 門のちんちんもるくく芭蕉うぬ  
 くらげ月萩や落乃色んんん  
 掃音もまらくくくくくくくく

牛家  
 老扇  
 盤中  
 一得  
 養房  
 免明  
 依圓  
 深松  
 養古

くやるあまの芝居くくく納涼が  
 花ハ今あまの川にさる干鯉うぬ  
 橋り中柱りも古き屋よりうぬ  
 白鳥やあう川にさる波のうぬ  
 志くくくく定家うくくみ時ぬく  
 唇のうくくく娘やあうもか  
 咲満くくくのれはははははは  
 夕まや戸よまよふはははははは  
 山まやうくくくくくくくくくみ

直麦  
 大斗  
 車燈  
 稲牛  
 倉胤  
 梅郎  
 金井  
 竟平  
 流光

猶此事ぬ衣ハ長——唱子繩 季令  
 高下中媚面よ忍めや白芙蓉 子得  
 白——とありそ物道里 神示 之思  
 煙をくたや史姉別あるあまを主 言責  
 若竹や下ゆくあも暗う——寸 鶴喬  
 涼——さや抱籠とく青新枕 五葉  
 山門や般着る——侍夕さ——み 羅光  
 浮世とく——ろ阿ソ世や休の秋 斗水  
 麻よりもかきむつ——参るや月 汀面

袖先う——文く居あるさ——みか 子無  
 閑山の像とく——山はく—— 百鏡  
 遠なる梅ある月れ衣比うれ 月知  
 妻面や門下柳を植そ——う 時中  
 う川少く——志良の朝乃身見が 吉磨  
 甲子の侍うひありて——うきた 曲川  
 同て月乃よ眠——百合の糸 采衣  
 涼——さよ月を文六の図雨 梅人  
 鳥てハ目姑さめぬ比能子哉 吉方

郭公吐や〜ぬ〜む地いちこ 白兔

他句

傘下り若菜法張の川誰毒そ 月巢

一日ハ巻く〜書りり虎の面 阿人

白ささのい〜るそ法美橋うか 洛梅

紫陽花や漸起〜知ん〜け 葵且

口上の毎系〜する粽の神 耳得

折を〜家も忘〜橋か肌 全危

け〜のさ〜り〜成り〜る〜て〜あ〜り 兀子

紫陽花や〜あ〜み〜あり〜と〜水の音 初房

あ〜る名や日校〜り〜と〜ぬ見やを 栢泉

待急〜下〜縦軸ハ〜か〜 一 郭云 奇峰

う〜傍の松ふ〜木あ〜る〜ふの月 松柯

雪のい川と啼〜そ〜ち〜る〜さ〜く〜 曙山

如小ハ男と刃〜ゆる〜美善〜う〜れ 大耳

り〜少〜の〜き〜豊〜れ〜あ〜る〜法〜は〜き〜ん 梅富

因雨〜下〜上〜う〜れ〜う〜つ〜復の月 官嵐

中居〜も〜実〜さ〜あ〜り〜た〜時〜鳥 周休

志〜言をう〜や波〜ふ〜加〜る波  
 夜啼此〜枯比や麦乃秋  
 咲比〜中〜つ道か〜一葉や水仙花  
 百子多一羽子〜之〜何〜きん  
 や志〜〜一烟をふくむ柳うね  
 豆影や水〜く〜うぬ牛の舌  
 俊者の屁はきうぬう〜く葉の記  
 蜂〜〜ふ杖よあ〜りし胡蝶哉  
 雪をふの雪みせん井乃おく

左に 養生  
尾羽 菊平  
 也育  
 曉登  
 蝶紅  
 意長  
大坂 旧園  
 茶汁

葱の香はあ〜りよ志〜中〜はあ仙花  
 秋の秋はあ〜りあ〜り〜先や〜の川  
 かしよせ〜く志〜〜一〜か〜む〜落〜葉〜哉  
 目ら落〜て増〜く〜そ〜ん〜中〜春乃水  
 富士山〜の〜埋〜こ〜ゆ〜〜一〜く〜志〜意〜哉  
 鼻紙〜〜中〜物〜去〜て〜〜る〜大〜等〜う〜ね  
 梅〜香〜や〜縁〜よ〜物〜得〜と〜比〜紅〜尾〜寺  
 傘〜あ〜せ〜る〜志〜意〜や〜素〜も〜詠〜志〜意〜中  
 雪〜〜中〜潤〜子〜阿〜は〜さ〜る〜の〜管〜と〜注

紀伊 湖堂  
京 蝶爰  
 法九  
 儿董  
 荻村  
イヨ 祇列  
イカ 相取  
イセ 素因  
上総 指月

炭火の光もさすくく一葉燭

イセ 白

梢くくく記帳やうる此言

カミ 此推

うそくさくさくや梅の花

カミ 抱村

下園や足の内やうる此言

カミ 葉里

おちりふりくくけくや秋の風

カミ 蝶碎

苗代をんくく川新や後くく

カミ 杏麻

聖母くく入日を下りる雲をば

カミ 度雄

六月や藤原北山河小砂河系

カミ 政宗

嬉しくさくく初蝶のそよ記

カミ 蓬戸

三尺のくくく細くく雲雀うか

カミ 宿葉

花咲くく君れ中あるいほりか

カミ 李童

くくくさくさくさくくもさくく

カミ 園更

蠟燭れ燃く流くくくくく

カミ 蝶河

松く枝をくくくて梅くく旭く林

カミ 昔叟

帆柱れ総の輪子や花さくく

カミ 和文

面雲や袒又も連くく木綿糸

カミ 卜全

木つさの夕日をたぐく梢く神

カミ 青面

子を思ふ暑さくくやあもく

カミ 蓋川



夏の萩と書ふよりかたの萩少の 投茶

橋見やとすれくよ書ての仙臺 古道

渺くと帆を川白く郭公武カハラツ子 控司

よき釣の初こそ見ゆ也道牧乃書 士等

入おのりきり水草を門乃書上総 更仙

炭のほやきんうすこの一とあり下総 眠江

夏際を女ととふ一草は花武笠山 巴巻

けまやまをりかろく歌法師下総 直来

む川へさし山際を志と道哉下総 玉峰

橋ありやちや和綴りかく城サカシ 石鑿

山吹を喰ち喜れうすうれ 志尾城

森ころへを食よちるや夕さる南総 群長

安永五丙申年三月

戸倉屋喜兵衛

加

子

